

抄録 : 長時間透析の歴史と今

History of long-hours hemodialysis and today

演題名 : 長時間透析の歴史と今

学会名 : 第 67 回日本透析医学会 シンポジウム「よりよい長時間透析を目指して」

日時 : 2022 年 7 月 3 日

医療法人幸善会前田病院

前田 利朗

慢性腎不全に対する血液透析療法は 1960 年に Scribner によって始められたが、黎明期の透析時間はキール型による 1 回 24 時間、週 1 回程度から 1 回 10-16 時間、週 2 回、さらに 1 回 8 時間、週 3 回と試行錯誤しながら変遷した。その後、中空糸型など効率の良いダイアライザーの登場により、米国の透析時間は急速に短時間化した。

日本においては、本会の前身である人工透析研究会が発足した 1968 年当時、国内の人工腎臓装置は 101 台に過ぎず、患者数も 200 名を超える程度であった。同研究会の初期のアンケート調査によると、透析回数は週 2 回が 60% と最も多く、週あたりの透析時間はコイル型で 12 時間、キール型で 16 時間程度とある。1972 年に更生医療が適用され、人工腎臓装置と透析患者数は急速に増加し、同時に透析医療は研究から実地医療へと移った。キール型による 8 時間透析は準備・始末の煩雑さと標準勤務時間を超過する治療時間などの理由で次第に衰退し、代わってコイル型や中空糸型などの透析効率の良いディスポザブル・ダイアライザーが、肝炎予防の観点からも急速に普及することになった。

筆者が透析医療に従事し始めた 1974 年当時の福岡では、コイル型による週 3 回、1 回 4 時間の週 12 時間透析がほぼ主流となっており、恐らく国内の多くの透析施設が同様の傾向にあったと推察される。九州大学第二内科では増加する透析患者に対応するため、1974 年に福岡市内の私的透析施設をサテライトとして運用することになったが、その際、腎臓研究室主任藤見惺は 8 時間勤務の中で治療を完結させる方法として、準備と片付けに 1 時間ずつを取り、残りの 6 時間を透析時間に充てた。これが九州大学の 6 時間透析のスタートであり、筆者は以後 50 年にわたりこの 6 時間透析を継続してきた。2005 年に長時間透析研究会が発足して以降、学術集会開催等の啓蒙活動により長時間透析（週 18 時間以上）の賛同者は徐々に増えてきている。なかでもオーバーナイト透析は日中の時間を有効に使えることから勤労患者にとっては好ましい治療法として推奨されるが、一方でこれに要する経費やスタッフ確保は医療者側にとって高いハードルとなっており、今後の解決すべき課題である。